

伽羅紗

あらすじ

堺の大教会で、細川ガラシャの一周忌のミサが、夫忠興とその子光千代の手で行われている。愛と信仰に殉じたガラシャ。その気高く、優しく、類まれなる美しさと賢さを併せ持つ女性の生涯が、神父オルガンチノによって語られる。

明智光秀の娘玉子は、織田信長の命令にて、細川藤孝の長男細川与一郎忠興のもとに嫁ぐことになった。夫忠興は、玉子を心から愛した。夫の愛を一身に受けて玉子は幸せであった。しかし、幸福の日々も、父光秀が本能寺で主君信長を討ったことで、急激な変化が訪れた。光秀の天下も、秀吉との戦いに敗れ、落ち武者狩りの農民の手によって、小栗栖の土と消えた。

天下を統一した秀吉の目を逃れるために、忠興は玉子を丹後の山奥険阻の地(味土野)に隠した。二年半の間、玉子はその地に隠れ住んだ。その静寂の地で、玉子はキリシタンであった侍女の清野から、神の教えを聞いた。ひたすらに神を信じるという、その教えは、玉子の胸に深く響いた。

夢にまで見た夫忠興からの迎えが来た。別かれていた時間を埋めるように忠興は玉子を愛した。誰にも見せたくない、特に他の男の目には触れさせたくない。外出も許さない忠興の愛は独占的であった。信仰に目を開いた玉子は、その忠興の眼を盗んで一度だけ教会に足を向けた。神父に教えを問い、愈々、信仰の心を深くした。

秀吉の死後、関東家康と大坂石田三成の間で戦いはじまろうとしていた。忠興は九州征伐で留守であった。三成より、玉子を人質として差し出すようにと使者がおくられた。玉子は夫の愛に忘えるために死を決意し、人質を拒否した。三成の軍勢が屋敷を取り囲む中、玉子はお祈りを捧げて、神の御許へ行く。